

砂の舞う島

鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校 二年

鮫島海里

少女は小さな棧橋に座り込み、水平線を眺めていた。もう一時間も船を待っている。少女は「予定の時間よりかなり早く着いてしまった」と、長いため息をつく。首から提げている小さな時計を一瞥した。約束の時間が近づいている。そろそろ立ち上がり、小さな手でお尻をはいた。すると、砂が舞った。その砂はそのまま地面に落ちると、ほかの砂と同じように空へと上っていった。

この島は砂でできている。砂漠の黄色、赤、砂浜の白、様々な色の砂が混ざり合いこの島の幻想的な風景を作り出している。そして不思議な現象を起こすのだ。風が吹かなくても、誰かが全速力で砂の上を走らなくても地面から砂が「舞い上がる」。それは「砂埃」と言うほど生優しくはない。多くの砂が、ゆっくりとではあるが世界の物理法則から、この星の引力から引き離されるように空へと舞い上がっていくのだ。この島の民族衣装は、その現象が昔からあったことを意味する形をしている。手首と足首は太いリボンで縛られ、砂が侵入しないようになっていて、フードは、オーバーサイズで頭

のてっぺんから首まですっぽりと覆っている。この服は未だに使われていて、先の少女もこの服をまとっていた。

大きな船が水平線に現れ、こちらへと向かってくる。大陸から遠く裏側にあるこの島には人の出入りが数年に一度しかない。だから定期船も存在しないのだ。しかし、今回は船の運航会社に臨時的に船がこの島の近くを通るよう要請した。彼女の待ち人はその大型船に島の近くまで送ってもらい、小舟でこの島に上陸する手はずとなっている。小舟が近づくまでの間彼女は、立ち上る砂を感じていた。

このところ舞い上がる砂の量が増えた。そう言われ始めたのは今年に入ってからだっただろうか。これまでの島の記録にその様な記述がなかったため島の集会で一度調べてもらうことが決まった。長老が伝手をたどって世界放浪の旅をしているという地質学者に手紙を書き、今回この島に訪れてもらったのだ。それが彼女の待ち人の正体である。

小さな船からロープが投げられた。少女はその太いロープを少女なりの精一杯で引き、棧橋の係留用ポラードに巻き付けた。

「長旅ご苦労様です」

彼女は静かに言った。まるで機械が発音したようになめらかではあるが、個性は感じられない話し方だ。

「こちらこそ、僕を待ってくれてありがとう。今回この島について研究することができて光栄に感じているよ」

そう言って彼女に向かってほほえんだ。こちらも静かな人

のようだが、言葉の端に温かさを感じる。

「初めまして、あなたの案内役を長老様から言いつけられています。今から案内しますがよろしいですか」

「もちろん。この島の研究を依頼したのは長老さんだ。この島についていろいろ聞きたいこともあるから、ぜひ」

「分かりました。道中足下にお気をつけください。あとこれ、ゴーグルとリボンです。ゴーグルをはめてリボンでズボンとシャツの裾を縛ってください」

「ありがとうございます。ゴーグルは持っているから大丈夫だよ」

そう言つて青年は受け取ったりリボンで服の裾をきつく縛り自前のゴーグルを荷物から取り出した。行き場をなくしたゴーグルは彼女の首に収まった。

二人はしばらく無言で歩いた。青年はこの島の風景に心奪われていた。地面から砂が何の予兆もなく不意に舞い上がり、そのまま空へ溶けていく。青年が長老から受け取った手紙にはこの島の風景が映し出された数枚の写真が入っていた。それを一目見たとき彼はこの島の虜になった。ほかの土地や国との交流・交易を行わなかったせい、青年は流浪の研究者でありながら、この島の存在を知らなかった。空と地面と砂の幻想的なコントラスト。高低差のない平野の刻一刻と変わっていく風景。空の色で砂の色も変わっていく。青年はこの現象解明の役をもらえたことに奇跡を感じていた。

「着きました。ここがあなたに手紙を送った長老様の家です」
そこは今まで通つてきた道から見えていた家とは、大きさ、

形、色の違ういかにも偉い人の住むところというたたずまいだった。

「ここには長老が住んでいます。それと同時にこの島の寄合所でもあります。大きく見えますが、長老一家の居住スペースはほかの家と大して変わりません」

少女はそう言つて青年を玄関まで案内した。

「扉を開けた次の部屋で砂を払つてリボンとゴーグルを外してください。全部できたらその次の部屋で靴をおいてまっすぐ廊下を歩いてきてください。その先の部屋であなたを迎える準備がしてあります。私は先が上がって長老を呼んできます。時間がかかってかまいませんので。何か問題など起こりましたら備え付けの内線で誰か呼んでください」

「分かった。この二部屋先の廊下をまっすぐ行ったところにある部屋だね。分からないことがあったら内線で呼ぶよ」

「はい。それでは失礼します」

少女はそう言うと言青年に案内したドアとは別のドアを通過どこかへ行ってしまった。青年は、彼に手紙を送った張本人にもうすぐ会えると期待に胸をならしつつ、少女に指されたドアをゆっくりと開けた。

「準備ご苦労様です。何も問題ございませんでしたか？」

青年が長い廊下を歩いて行くと、つきあたりのところで、少女が彼を待っていた。

「ああ、大丈夫だったよ。心配してくれてありがとう。この

先の部屋が長老の居る部屋かな」

「はい。この先に先ほど長老様をお呼びいたしました。今からご案内します」

少女はそう言うと言と扉を開けた。

「長老様、学者さんがいらつしやいました。お通ししてもよろしいでしょうか？」

少女が扉の先に問いかける。しばらくして何も返事がなかったが、少女は青年を部屋の中に呼び寄せた。

部屋の中には先ほどから案内してくれている少女と、ある程度年をとった何人かの男女、そしてその中でもひとときわ年を重ねた様な風貌を持つ男が座っていた。少女はその男の前に一つ、どこから取り出してきたクッションを置いた。少女が青年にそこに座ってくださいと目で訴えかけて来たため青年は、そこに腰を下ろした。

「長旅ご苦労様だね。道中大変なことはなかったかい？ 私はこの島の長老で、君に手紙を書いた本人だ」

長老はそう挨拶をした。温和な表情を浮かべ、物腰も柔らかく、長旅をこなしてこの島にたどり着いた彼をいたわっているように思えた。

「初めまして。お手紙ありがとうございます。道中いろいろありましたが、長老からの手紙に同封されていた写真と同じ風景を見ることができて感激しています」

「そうかい。この島の風景はとても美しい。それがあなたに

も分かってもらえてこちらもうれしいよ」

「はい。私はこの世界の様々な場所を旅してきましたが、これほどに美しい景色を見たことはありません。この風景をこの目で見る事ができてこの仕事を受けてよかったと思っています」

彼は興奮しているようで頬が上気している。世界のどこを探しても、こんな景色が見られる所は他に無いだろう。長老も自分が生きてきた故郷を褒められて上機嫌だ。

「そろそろ本題に入りましょう、長老様。長老様がここに彼を呼んだのはそんな話をしたかっただけとは思えません」

しばらく二人が談笑していると少女がそう口を挟んだ。長老は忘れていたことを思い出したように咳払いをした。

「今回君にこの島を訪れてもらったのは、『砂が舞う』ことについてなんだ」

「はい。そう聞いております。ですが今まで長老が話しているらっしゃったのによると、この島の人々は昔から砂が舞い上がるのが当たり前だったのですよね」

「そうだよ。この島では砂が舞い上がることは普通のことだった。だけれど、つい一年以上前はこんなに沢山は空に舞っていないかったのだよ」

「といますと」

長老は少女に写真を持ってくるように言いつけた。彼女はもう準備をしていたようで懐から何枚かの写真を取り出し長老に手渡した。

「これが今の写真。数日前にとったものだ。先ほど君が着いた栈橋と、この家の前の風景。そしてこの島の何か所かを撮った写真」

そうやって並べられた写真に青年は何の違和感も抱かなかった。

「それで、これが数年前に撮った写真。場所はさっきの写真と同じ所だよ」

そう言っつて、二枚組になるように写真を並べた。その違いは明らかだった。

「確かに、写真の曇り方が違いますね。砂の舞っている量が多くなっている気がします」

「ああ、そうなんだ。写真でも分かるぐらいに舞う砂が多くなってきた。この島の記録を私やこの島の老人たちで調べたのだが、砂が増えるという現象が過去に起こったとの記述はどこにもなかった」

「へえ、それは不思議ですね。この島にはどれくらい前からこの記述があるのですか？ それから、それを読ませていただくことはできますか？」

「この民族の始まりの頃からの記述がある。もちろん何代も後の人々書き直しているから、そのときの記録がそのまま残っているわけではないが。それからその頃の記述は今私たちが使っているような言葉では書いていないから、あなたが読むことは不可能だ。しかしその娘には読み方を教えてある。その子に聞くといい。記録は貸し出せるぞ」

「分かりました。後ほど彼女に読んでもらいます」

青年は少女に向かってよろしくね、とほほえんだ。少女は黙って頷いた。そして、長老の方にすつと向き直った。

「では私は『なぜ砂の舞う量が多くなったか』ということを説明すればよいのですね」

「そうだ、実は砂がどうして舞うかも分かっていないんだ。舞い始めた時の記録はあるが、メカニズムは分かっていない。できればそれも説明してほしい」

「分かりました。その仕事承らせていただきます」

「ありがとう。この島に学者さんが来るのは初めてだから期待しているよ。よい結果が聞けることを願っている」

そこでいったんこの件についての話が終わった。長老と青年は食事や宿のこと、この島の歴史について小一時間ほど話し合い、情報がある程度収集できたところで青年は話を切り上げた。

「じゃあこの島のことについて案内してもらおうかな。仕事として来てはいるけれど、個人的にもこの島の風景には興味がある。遠回りでもいいからいろいろな場所を教えてくださいな」

青年は少女に向かってそう微笑んだ。少女はそう言われるのを待っていたと言わんばかりにすつくと立ち上がり、青年を外へと連れ出した。

二人は長老の家を出た。せかせかと先を歩く少女に向かって青年は声をかける。

「おい、ちょっと待ってくれよ。君が居ないと僕は道に迷ってしまう。日はまだ高いんだ。そんなに急ぐことはないだろう？」

彼の声が届いたのか少女はそこにびたつと止まった。青年の方を振り返った彼女は「あなたを置いて行っていたなんて気付きませんでした」と言うような表情をしていた。彼は笑って少女に駆け寄った。

「そういえばまだ君の名前をきいていなかったね。名前、教えてくれる？」

青年は少女に問いかけた。

「ああそうでしたね。慌ただしくて名乗っていませんでした。私はリーリエっていいいます。大陸の言葉だと百合って意味らしいです」

「いい名前だね。僕はユランって呼ばれている。もちろん本名ではないよ。放浪者って意味の単語を呼びやすくしたんだ。君のことはリーリエって呼ぶよ。君も僕のことには好きに呼んでくれていい」

「じゃあそのままユランと呼びます」

そう話しながら歩いてみると、さつきユランが到着した港に戻ってきた。

「ここからこの島の案内を始めます。いいですか」

「もちろん。でも地図を書きたいからちよつとまってね」

ユランはそう言うと言の中をまさぐって小さなスケッチブ

ックとペンを取り出した。彼の準備が整うと、リーリエは話し出した。

「ここが港です。この島には基本的に船は来ません。人が来るときはユランがしたみたいに沖で小型船に乗り換えてこの港に入ってくるしか方法はありません。また大陸に帰るとき、私たち島民が大陸に出向くときは船会社に連絡して船を沖までよこしてもらいます。そしてこの島で迷っても適当に歩いていけば港に着くので、最低ここから宿までの道だけ覚えておけば生活できます。では次行きますね」

そう言って歩き出す。次は島の商店、長老の家、子供たちの集会所、広場に農道その他主要な場所を案内された。ユランは地図を書きながら気になった点をメモしていったり、リーリエに質問をしたりした。リーリエがこの島の案内をあらかた終える頃、高く昇っていた太陽はもうすぐ沈んでしまいそうなほど傾いていた。

「ここが最後の場所です。この丘を登ると、村で一番きれいに砂が上っていく所と夕日と海が見えます。個人的にもこの島に来るのが楽しみだったってさつき言っていたのでここを案内しました。最後がここでよかったですか？」

リーリエはユランにそう問いかけながら登っていった。高い丘を登り切ると、上っていく七色の砂に包まれたオレンジ色のどこまでも続く海岸と、橙色から桃、紫、青そして濃紺へと刻一刻と変化する空、そして輝き始めた月と一番星が二人の視界を埋め尽くした。ユランはその景色に息を呑んだ。

そして絞り出すように

「すごく、綺麗だよ」

と一言こぼした。二人の服を絞るリボンが強い風で揺らめいていた。

「暗くなるまでここで風景を満喫しましょうか」

リーリエは告げると、その場にすくと腰を下ろした。

次の日、リーリエはユランの宿の前で彼が出てくるのを待っていた。今日から本格的な調査を始めるらしい。昨日、ユランと長老がした話し合いで彼女はこの調査が終わるまで、ユランの手伝いをする事が決まった。リーリエはふわつとあくびすると両腕を空に向かって伸ばした。そんなに早い時間ではないのだが、昨日リーリエとユランは、満天の星が輝き始めるまであの丘の上にいたため、まだ幼い彼女には睡眠時間が足りないのだった。

「リーリー、おはよう。昨日は遅くまでごめんね。それから調査用具の準備に時間がかかった。待たせたのも悪かった」

「おはようございます、ユラン。私が暗くなるまでって言ったので昨日のことに關しては謝らなくていいです。あと、そんなに待っていないです」

ユランは幼い彼女の大人な対応に、この子は将来いい子になるのだろうかと少しだけ想像した。そして胸ポケットから小さな手帳を取り出しリーリエに話しかけた。

「今日は地質の調査をしたいんだ。この島を適当に歩き回ってほしい。気になったところで声をかけるからそこでサンプル

ルをとろう」

「サンプルって、何ですか」

「聞いたことないかな？ どれくらいの深さにどんな土が使われているかとかを調査するのに、この島の土や砂や石が必要なんだ。詳しくは実際やっている時に教えてあげるよ」

頷いた彼女はそれから、と続ける。

「適当に、つてどういう道を通ってほしいとか、どういう所を見たいとか、希望はありませんか？」

「できれば昔の地質が表に出ているところを通ってほしいな。最近崩れたところとか、川の近くとか、そういう所。この島にあるかな」

リーリエはあごに手を当てて下を向いた。心当たりを検索しているみたいだ。ユランはリーリエの年相応なポーズを眼を細めて眺めていた。数秒後リーリエはふつと顔を上げた。

「はい、心当たりの場所があります。それに沿って今日のコースを決めました。ですが、お昼ご飯はどこで食べますか？」

「ああ、忘れてた。どこでもいいよ。リーリーの食べたいお店に入ればいい。僕は何でも食べられるから」

「ではそのとき一番近い食堂で食べましょう」

出発します。そう言って今日が始まった。

「リーリー、ここでちょっとサンプルをとらせてほしいんだけどいいかな」

歩き始めて数十分たった頃、唐突にユランが立ち止まった。

数歩先を歩いていたリーリエは立ち止まって「もちろん」と振り返る。背中に背負っていた道具をドスンと地面においたユランはそっと汗をぬぐった。

「ありがたい。じゃあサンプル集めを始めるね。楽しくないだろうけど我慢して。すぐに済ませるから」

ユランは荷物を開けながらリーリエに告げる。

「分かりました。何か手伝ってほしいことがあったら遠慮無く言うてください。私はきつとそれなりに使える人間だと思うので」

リーリエは座るのに良さそうな石を見つけて腰を下ろした。

声をかけられたときだけリーリエは立ち上がり、楽しそうに調査を手伝う。手伝っていない時もユランの動きをずっと目で追いつけていた。その視線はユランが調査をやりたく感じるほどだった。少し笑ってユランは言う。

「リーリエ、そんな真剣に見ていなくていいんだよ。楽しいものじゃないだろう。まだ時間がかかるから昼寝でもしたらどうだい？ 昨日遅くまで無理させたからさ。調査が終わったら起こしてあげるよ」

リーリエは首を横に振った。その間もユランの一挙手一投足でも見落としてやるものか、といわんばかりの勢いで彼の調査と彼を見つめていた。

「本当におもしろいんだね。見ていていけないわけじゃないから別にいいけれど。寝ないんだったらまた手伝いをしてもらおうかな」

その申し出を聞くとすぐにリーリエは石の上から降りてきてユランに駆け寄った。

「何をしましょうか」

このやりとりをするのも何回目だろうか。ユランが声をかけると駆けてくるくせに「別にあなたの調査を食い入るようになんか見ていませんけど」とでも言いたげに、興奮している様子も、わくわくしている様子もなく返答をするリーリエ。この子が僕の案内役でよかったと心からユランは思った。普段調査をするときは一人か、大柄な男たちに囲まれている。こんなに幼くて愛らしい子が近くに居るだけでこんなに楽しくなるのだと驚いてもいた。

初めてこの島に降り立った季節はとうに過ぎて、沢山のデータが集まってきた。二人で調査を行う時間が積み重なっていくほど、リーリエはユランになついていった。他の島民の前ではあまり表情も変わらないし、声の抑揚もつかないし、声を上げて笑いもしない。しかし、リーリエはユランと二人でいるときだけはぶっきらぼうに聞こえる口調だが語尾は幼く、その振る舞いも年相応になった。それはユランにとってとてもうれしいことだった。

ユランとリーリエの研究で分かったことは、この島は砂でできていること。そしてこの島を作っている砂はほとんど減ってきていて、この島の大きさもどんどん小さくなっていることだった。島が小さくなっていることに気付いたのはリーリエだった。

「港と、長老様の家はこんなに近くなかった。たぶん、きつとだけど」

そう言われたユランの行動は早かった。数時間後には、この島の数年前の地図を長老に持ってきてもらい、家から港までの測量を始めた。すると確かに距離が短くなっていたのだ。その後の調査でこの島の外側が海に侵食されると同時に、砂が大量に舞い上がっていくことで目に見える速さでこの島が小さくなってきていることが判明した。

今日一日の調査も後片付けを残すだけになった頃思い出したようにユランが言った。

「あのさ、リリー。そろそろ僕が集められるこの島のデーターは集めきるんだ。次は歴史について知りたいと思っている。だからこの島に砂が舞い始めたぐらいの記述がある記録を持つてきてくれないかな？」

リリーは答える。

「わかった。島の書庫から見つけてくる。いつ持ってくればいい？」

「そうだな、今晚あいているかい？　僕が晩ご飯を作つてあげるよ。僕の家においで」

「ん。了解した」

リリーは今から探しに行つてくると言つて、集会所の方へ歩き出した。ユランは一人で片付けを終えると、「リリーの方物って何だったっけ、何か食材残っていたかな」と脳内の食料庫を探索しながら商店に向かつて歩き出した。

ユランが火にかけた鍋を焦がさないようにしながら夕食の準備をしていると、トントントンとノックが三回聞こえた。リリーが来たらしい。火を止めて玄関に向かい、扉を開ける。

「いらっしやいリリー。晩ご飯の準備はもうすぐできるよ。どうぞ上がつて」

「お邪魔します」

きちんと靴をそろえ、砂をはたきリボンをはずす。こういうときでないとリリーの素顔や肌を見ることはできない。室内でリリーの表情を見ながら話すことはユランが彼女の家へ招いたときの密かな楽しみでもあった。

出てきた夕食はさすが流浪の研究者。この島でしか食べない食材も自分なりに調理して、見た目もおいしそうに盛っている。この島の人に振る舞ったところ、評判だった。

「どう、リリー。味は大丈夫かい？　リリーがよく食堂で頼むような料理を作つてみたんだけど」

リリーの前で同じ料理を食べるユランが問いかける。返答はなかったが、心なしかいつもより箸が進んでいるように見えるのでユランは満足した。

「急いで食べなくても残っているし、誰も取らないから落ちて置いて。お口に合ったのならよかったよ」

そう言うユランも自分の食事に戻った。

二人が食べ終えて、片付けをし、少し休んでいると、袋を抱えたリリーがユランのそばに寄つてきた。

「本。持ってきた。読んでいい？」

「そうだ。今日は夕食をともしにするためにリーリエを呼んだんじゃなかった。当初の目的を思い出したユランは

「お願いします。記録をつけるのにノートを持ってくるから待っていて」

と言つて別の部屋に荷物を取りに行った。
帰つてくるとリーリエのすぐ横に座った。

「じゃあ改めてお願いするね」

「ん」

返事をしたリーリエは袋から古びた一冊の本を取り出し机においた。よくわからない文字で書かれたページを一枚ずつめくりゆっくりと話し出した。

「今日は不思議な現象が起きた。というよりこのところ不思議な現象が続いている。それは砂が不規則に空へと向かって跳ねるといふものだ。今までこの島の『砂』が何の前触れもなく空に向かって跳ね上がることは無かった。ここ数日、島のあちこちでぼつ、ぼつ、ぼつ、と砂が跳ねるようになった。一か所だけではなくて、どこかで見たような風に舞っている。これに気付いたのは青年だった……」

「じゃあ次の記述ね。そう言つてまた読み始める。

「この前『砂が舞う』ことについての記述をした。どんな法則で跳ねているのかというのを観察していたのだが、一つ心当たりを見つけた。砂が舞った場所に点を打つていくと生き物が歩いたときに付く足跡に似ている気がしたんだ。まあそ

れが何なんだといったらそうなんだが。ふと思ったので書いておこう。」

「次ね。まだ続ける。」

「舞い上がる砂の量が安定し始めた。といつても今までも少しずつ増えていたみたいだから本当に安定しているのかは分からない。数代前の人の記述に生き物の足跡とあったが、そんな感じは全くしない。何を見てその人はそう考えたんだろう。」

「じゃあ次。」

「そう言つて数十ページ読み続けた。」

「ごめんリーリエ。質問していいかな」

「難しい顔をしていたユランが思いついたようにリーリエに告げる。

「あのさ、その記述について書かれたか分かる？」

「リーリエはページを繰った。」

「最初が三〇〇年前。安定したのが一〇〇年前って書いてある」

「その数字をメモしてリーリエに向き直った。」

「ありがとう。一つ思いついたことがあったよ。これからちよつと大陸に住んでいる知り合いと電話をするから部屋にもるね。今日は遅いから泊まっていつていいよ。おやすみ」

「そうゆっくりと告げたつもりだったのだけれどそんなことはなかったようだ。急に変わったユランの口調に不思議そうな顔をしてリーリエは頷いた。ユランは何かぶつぶつ言いな

がらさつき荷物を取りに行った部屋に入っていた。

「まずいことになった」

ユランはつぶやいた。今リーリエに読んでもらった話が正しいとするならば、大陸の友人に連絡するまでもなく、原因が一つに絞られてしまった。三〇〇年前といえ、大陸に人が住み始めた時代。そこからどんどん人が増え、大陸に住む人口が一定になってきたのが一〇〇年ほど前。大陸に住み始める人と出て行く人、生まれる人と亡くなる人が同じぐらいの人数になるように調整されるようになったからだ。人口の均衡は最近まで破られていなかった。が、ここ最近その大陸で「人口爆発」が起き始めているというニュースをこの島に来る前に聞いたばかりだった。大陸はちょうどこの島の対蹠地にある。ユランは考えた。もうこれしか思いつかなかった。

『大陸の人が地面を歩くとその反動で対蹠地にあるこの場所の砂が空に向かって落ちていく』

だから三〇〇年前初めて人が住み始めたときは生き物の足跡のように見える所に砂が舞っていた。長い時を経て、大陸に住む人口も増えたため、縦横無尽に人が歩くことから、足跡のような感覚は無くなってしまったんだろう。ここまでの研究の結果、この数か月でこの島はどんどん小さくなっていく。あの大陸の人口はまだ増え続けるだろうから、この島は

もつと小さくなる。人口爆発を止める手段はどこにもない。

来年の今頃、この島は塵としてこの星の空気の中に拡散し、空中に、跡形もなく、消失しているはずだ。ここに残っているのは、海に沈んだ建物だけだ。

「一人で考え込んでいてもしょうがない。明日の朝、リーリエを家に送り届けるときに長老の家に寄って、夕方に人を集めてもらおう。そこでこのことについて話をしよう。」

ここで集めた資料が散らばった机の上を片付けて、布団にくるまる。この島の人たちはどういう決断を下すのか。一緒に調査をしてくれていたリーリエはどう考えるのか。明日起こることを思っていると、いつの間にか意識が遠のいていった。

朝が来た。きっと今日がこの島のどの人とっても、人生の中で一番大切な日になるだろう。いつもと同じ太陽の光がカーテンの隙間から差し込むのを感じた。

リーリエは昨日日本を読んでもらった部屋のソファで寝ていた。この年頃の女の子にしては身長が低い彼女は、いっばいに足を伸ばして気持ちよさそうに寝ている。

「リーリエ、おはよう。おーい？　もう朝だよ」

リーリエはあまり朝に強くないみたいで何度か声をかけてもなかなか起きてくれない。一度リーリエのそばを離れてキッチンで朝食の用意をした。

「それじゃありりー、行こうか」

朝食を食べ終えた二人は連れだつて玄関の扉を開けた。ユランの荷物は普段長老の家に行くときよりもいくらか多く、リーリエは疑問を口にした。

「ねえユラン。どうしてそんなに荷物が多いの？ 昨日の夜何かあったの？」

「そうだよ。あの後いろいろ調べたら原因が分かったんだ。それを今日長老に報告しに行く。だから荷物が多いんだよ」

少しだけ嘘を交ぜたがほとんどは事実だ。小さな罪悪感にさいなまれながらそう答えた。

「じゃあユランはもうすぐ居なくなっちゃうんだ。ふーん。送別会をしないとね」

こんなに幼い、無邪気で聡明な娘にも、真実を伝えなければならぬのか。改めて思い知ると、何とも言い表せない気持ちを抱いた。

「ありがとう。今日の報告がうまくいくといいね」

通された部屋はこの島に訪れたその日に通された部屋と一緒だった。いつもと変わらぬ様子で座る長老に少しだけほつとした。

「おはようございます、長老。今回砂が舞うことの原因とこれからが分かかったのでご報告に来ました」

「そうか。思っていたほど長くはかからなかったのだな。調査、ご苦労様。じゃあ聞かせてもらおうかな」

そう告げた長老は居住まいを正してユランに向き合った。

ユランはこれまでの調査のことと考えたこと、それから導き出される結論。専門家ではない長老にも分かりやすいようにかみ砕いて伝えた。

「ここからが、一番重要な話で、まだリーリエにも伝えていません。かなり衝撃を受けるかもしれませんが、リーリエは退出させなくてもいいですか？」

ユランはそう問うた。これからの話はこの島や長老たち、この島の人たち、そしてもちろんリーリエの将来にも関わる。

「私は、ここに居たいです。私の未来に関わる話ですし、これまでユランとともに調査してきました。ユランの出した結論をちゃんと聞きたいです」

ゆつくりと、覚悟を決めてそう言ったリーリエを見つめて長老は微笑んだ。

「じゃあここに居るといい。ユラン、続きを話してくれ」

「……この島は、もうすぐ、無くなります」

「どういうことかい。それは」
こんなことを言われて、すぐに理解し、受け入れられる人はどこにもいないだろう。長老は少し眉をあげ、冷静にその言葉を発した。

「この島はほとんどが砂でできています。少なくとも海面より上の高さがある場所はすべて砂です。大陸の人口は今も増え続けています。そして、私が調査を始めてからもこの島は小さくなり続けています。その速度や、人口増加量を考慮すると、この島は消えてしまいます」

「それはいつ頃になるかは分かるかい？」

「私が帰る時にこの島の近くに寄ってもらおう船が最後の定期船になると思います」

「そうか。すぐのことなんだね」

「はい。昨日大陸に住んでいる友人に尋ねてみたのですが、避難用の船をこちらに寄越すことは可能だそうです」

「分かった。このことは一度島の人たちと話させてもらおう。ユラン、今日は帰っていいぞ。ご苦労様。いつこの島を出ようと思っっているかい？」

「そうですね、次来るのが数日後なのでその船で帰ろうと思っっています」

「そうか。この島を出て行くときには送別会をしよう。今日はこれで、これから島のみなを集めるよ」

長老は部屋の外から呼び寄せた人に、この島の大人を集会所に集めるように話をした。

「分かりました。それでは私は退出します。長時間おつきあいくださりありがとうございます」

「リリーはどうするかい？　ここで……」

「リリーエ、ここからはこの島の大人との話し合いだ。彼と一緒に外に出なさい」

そう長老は強く告げた。リリーエはその言葉に頷きユランとともに長老の家を後にした。

先日あった島内の大人たちによる会議はとても長引いたそうだ。先ほど長老に呼ばれていたリリーエがそう言っていた。

「みんなこの島に残るんだって」

「え、なんで」

「この島の人たちの大半はこの島の暮らししか知らないの。それに、今更この島から大陸に移ってもうまく暮らしていかるか分からないし……なんだって。おしまいになってもいいから生まれ育ったここで最後まで暮らしたいって結論になったって」

「ああ。そうか。分かった」

「それから長老様がユランを連れてきてって。何か話があるみたい」

「分かった。それなら行ってくる。船を依頼した話もしてこないといけないし。留守番していてくれるかい？」

「ううん。私も一緒に呼ばれているから。一緒に行くよ」

「じゃあそうしよう。準備してくるから少し待っていてね」

「それで、話とは何でしょう」

それから数十分後二人の姿は長老の家の中にあった。たぶんこの部屋に入るのも今日で最後だろう。少し名残り惜しい気もした。

「この島の人たちはこの島が無くなるとしてもこの島に残ることに決めたという話はしただろう」

「はい、リリーからそう聞きました。偉大な決断だと考えています」

「そう思ってくれるか。そうなら嬉しいよ。実は今日君を呼

んだのはリーリエのことなんだ。単刀直入に言う。リーリエを連れてこの島を出て行ってくれないか？」

「え……」

リーリエが息を呑むのが聞こえた。

「リーリエにも初めて言った。この子はまだ若いし、この島の他の子供たちとは違う生き方をさせてきた。私の孫であつたし、他の子供たちよりも大人だろう。だから大陸に連れて行っても大丈夫だと思う。それにこの島でこの子の人生を終わらせてはいけないと思うんだ」

そう言つてリーリエの方を向く長老。彼女は一瞬彼の方を見たが、すっと視線を下げた。

「誰か、付いてきてくださるのでしょうか」

「いや。この島の者は誰もついて行かない。リーリエだけだ」

「少し考えさせてください」

うつむいたまま細かい声でリーリエは言つた。

その日の日暮れ、二人は村の丘の上にいた。ユランが初めてこの島に来た日、リーリエに最後に連れてきてもらった所だ。

「僕は明後日この島を出るよ。リリーは少なくとも明日の夜までにはこの島を出て行くか、それともここに残るかを決めなくちゃならない。どうしようと思つているの」

「私は、ユラン以外にはあまり感情的にならない。甘えもしないし怒りもしないし、文句も言わない。だからきつと長老

様や他の大人たちや同年代の子供たちに大人びた子だと思われてる。だつて長老様の孫という立場だから。でも私はユランが知っているとおり年相応だし、そんな大人びた子じゃない。一人でこの島を出て行つて暮らしていけて急に言われても困るでしょう。しかも私以外のこの島の人たちはきつと死んでしまう。これからもずっと会えない。どうしなさいつて言うんですか」

「そうだね」

「私だつて死にたくない。この島がなくなることを分かつていて、この島で生きていくことなんてなおさら。きつと。だけれど、知っている人がいない中、生活していくことなんてできない。この島から出ていくのも行かないのも私にとつては苦渋の決断なんだよ」

「あのね、リリー。リリーは勘違いをしているよ。リリーがこの島を出て行くことになつても知つている人が誰もいないわけじゃないよ。だつて僕はこの島を出て行くことに決まつているから。リリーがこの島から出ていくことを選ぶんだつたらリリーが大人になるまでは僕が面倒を見る。さつき長老と話した後、僕だけ少し呼ばれただろう。そう長老にお願いされたんだ」

「そうだとしても、ユランは流れの研究者でしょう。いつかユランの足手まといになるよ。こんなに小さい子を連れて世界を回るなんて」

「もしリリーがこの島から出ないという決断をするのなら、

無理に連れて行くことはしない。でもリリーがこの島を出て行く決断をして、その上で僕と一緒に回りたいと思うんだつたら、僕は絶対にリリーをどこかに置いていたりはしないよ」

そう言うときユランは立ち上がった。夕暮れが今日も二人を照らし、砂はどこまでも舞い上っていた。その風景が近いうちに無くなってしまふとは思えないほど綺麗だった。

昨日は長老やこの島の人たちが遅くまで送別会をしてくれ、どんちゃん騒ぎだった。島の人たちには、今日は朝が早いし名残惜しくなるから見送りはしなくていいと伝えた。それなりに長い時間を過ごしたこの島を出て行くのは感慨深いものがあった。もう見納めになる砂の上る風景を見ながら、この島に着いたときにリリーが引っ張ってくれたロープをボードから外す。小舟にロープを投げ、乗って、ゆっくりとこぎ出した。

「この景色も最後だね」

リリーは涙を一つぼろりとこぼした。

「うん、そうだね」

ユランは言った。

「ねえリリー、どんな風景を見てみたい？」